



公益財団法人 山階鳥類研究所



絶滅危惧種のガン類、カリガネの渡りルート追跡に 日本で初めて成功しました

山階鳥類研究所と雁の里親友の会は、2020年12月に宮城県の越冬地で捕獲し、発信器を装着した絶滅危惧種のカリガネが、2021年9月24日にロシア北極圏へ約16,000kmの渡りを終え、再び越冬地に帰ってきたことを確認しました。日本での発信器での追跡、渡りルートの解明は初となり、今後のカリガネの生態研究、保全を進める上で、重要なデータを得ることができました。

※本研究は地球環境基金の助成を受けて実施しました。



2021年10月2日宮城県で撮影された発信器付きカリガネ（写真：狩野博美）

背景

カリガネは、ユーラシア大陸北部で繁殖し、ヨーロッパ及び東アジアで越冬する渡り性のガン類で、IUCN（国際自然保護連合）レッドリストでVU、環境省レッドリストで絶滅危惧Ⅱ類に指定されている希少種です。近年、東アジア越冬個体群は、主要越冬地である中国・長

江流域の生息地の劣化により、急激に減少しています。一方、日本で越冬する個体群は、2010年代から宮城県の越冬地で増加傾向を示し、2019年には300羽を超える数まで増加しました。今後、カリガネの保全を考えていくうえで、増加している日本のカリガネの生態研究は欠かせないものとなっています。

本研究では、カリガネを発信器で追跡することにより、繁殖地、渡りルートなどを明らかにし、渡りルート全体での調査を通じて日本のカリガネ増加の原因に迫ることを目的としています。2020年12月に、宮城県内で1羽のカリガネを捕獲し、発信器を装着、追跡を開始しました。この発信器は、GPS衛星からの電波を受信し、位置情報を算出して、携帯電波網で送受信するものです。

春の渡り

12月に発信器を装着したカリガネは、2021年2月27日に越冬地を出発しました。春の渡りでは、青森県弘前平野、北海道石狩平野を経由し、4月5日にサロベツに到着しました。5月11日にサロベツからさらにサハリン西海岸を北上し、その後オホーツク海を横断しカムチャツカ半島西海岸を北上しました。5月28日には、日本から約4,000km離れた、チャウン湾の東側のPegtymel川(Пегтымелъ)川に到着し、6月26日まで1か月ほど滞在しました。その後、7月8日～8月13日までコリマ低地、8月23日～9月19日までチャウン湾西側の湿地に滞在しました。

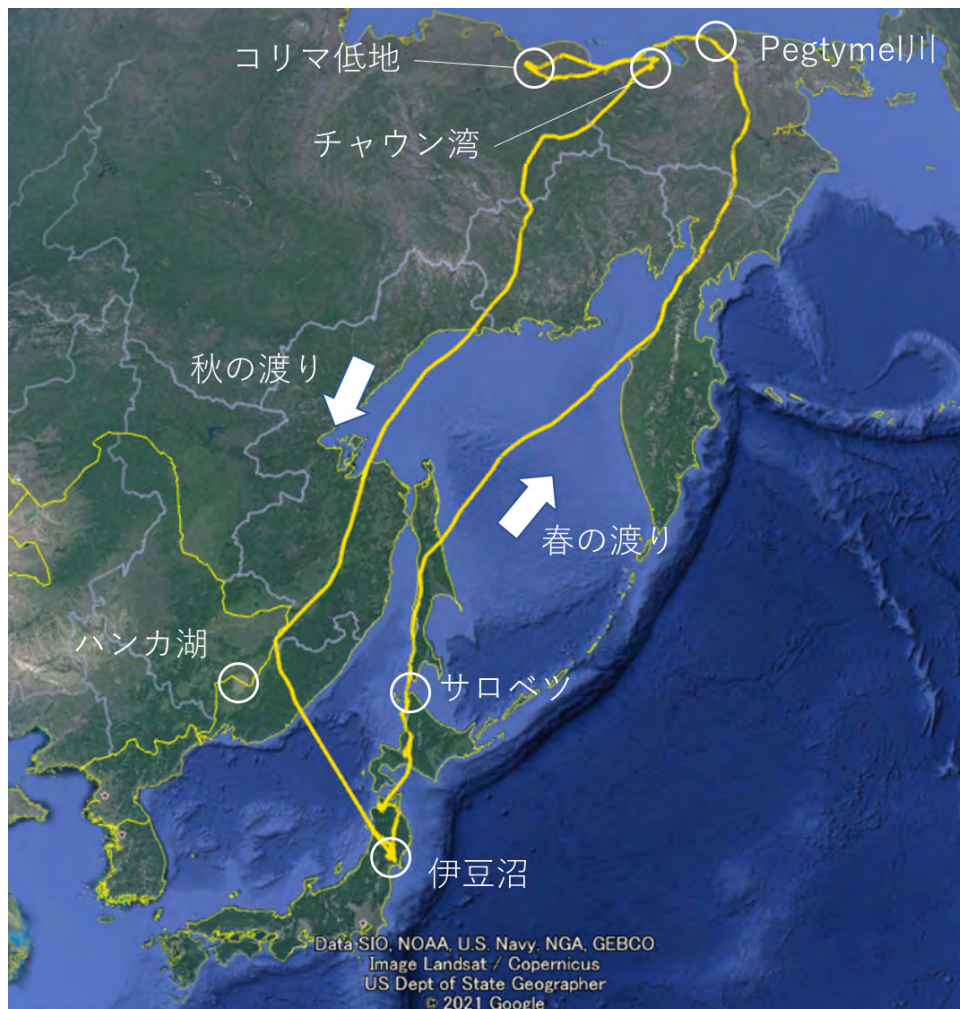
秋の渡り

秋の渡りは、9月19日に開始されました。シベリア内陸部をほぼ休息なしに南下し、9月23日にはハンカ湖の手前で方向を変え、日本海に出ました。そのまま日本海を横断し、9月24日に秋田県八郎潟に到着しました。八郎潟で数時間滞在後、八郎潟を出発した2時間後の24日朝8時に宮城県伊豆沼に帰ってきました。

今後の課題

6月に滞在したPegtymel川は、カリガネの繁殖地である可能性が考えられます。しかし、本個体は捕獲時にペアになっていない単独個体であったこと、Pegtymel川には1か月程度しか滞在していないことから、繁殖していない、もしくは繁殖に失敗したと考えられます。また、7～8月に滞在したコリマ低地は、1か月以上にわたって狭い範囲を移動していたことから、羽の生え変わりをおこなう「換羽地」である可能性が考えられます。これらを明らかにするためには、今後のさらなる追跡と現地調査が必要です。

中国のカリガネを追跡した先行研究と比較すると、春の渡りでは異なるルートを通っていますが、秋の渡りではハンカ湖の手前までは非常によく似たルートを通っていました。また、中国越冬個体群と換羽地も近いと考えられます。今後、さらに例数を増やしていくことで、中国個体群との比較研究を進めていきたいと考えています。



発信器追跡を行ったカリガネの渡りルート。

お問い合わせ先

※写真のデジタルデータをご希望の方もお問い合わせください。

山階鳥類研究所

保全研究室 研究員 澤祐介

TEL: 04-7182-1101 FAX: 04-7182-1106 E-mail: sawa@yamashina.or.jp

広報担当 山階鳥類研究所広報コミュニケーションディレクター 平岡 考

TEL: 04-7182-1101 E-mail: hiraoka@yamashina.or.jp

雁の里親友の会 事務局長 池内俊雄

FAX: 0229-52-5698 E-mail: foster_a_goose_2018@nifty.com